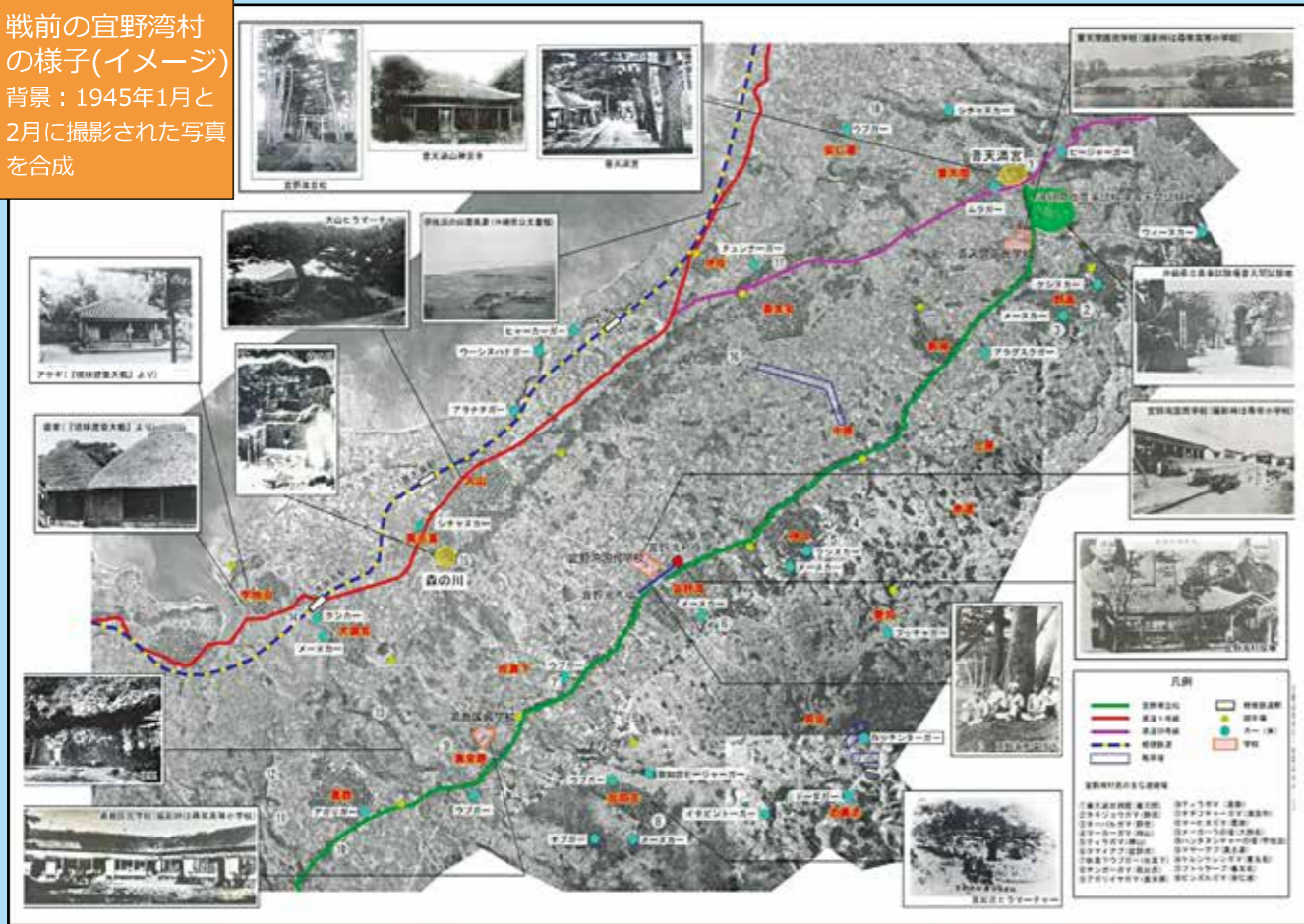
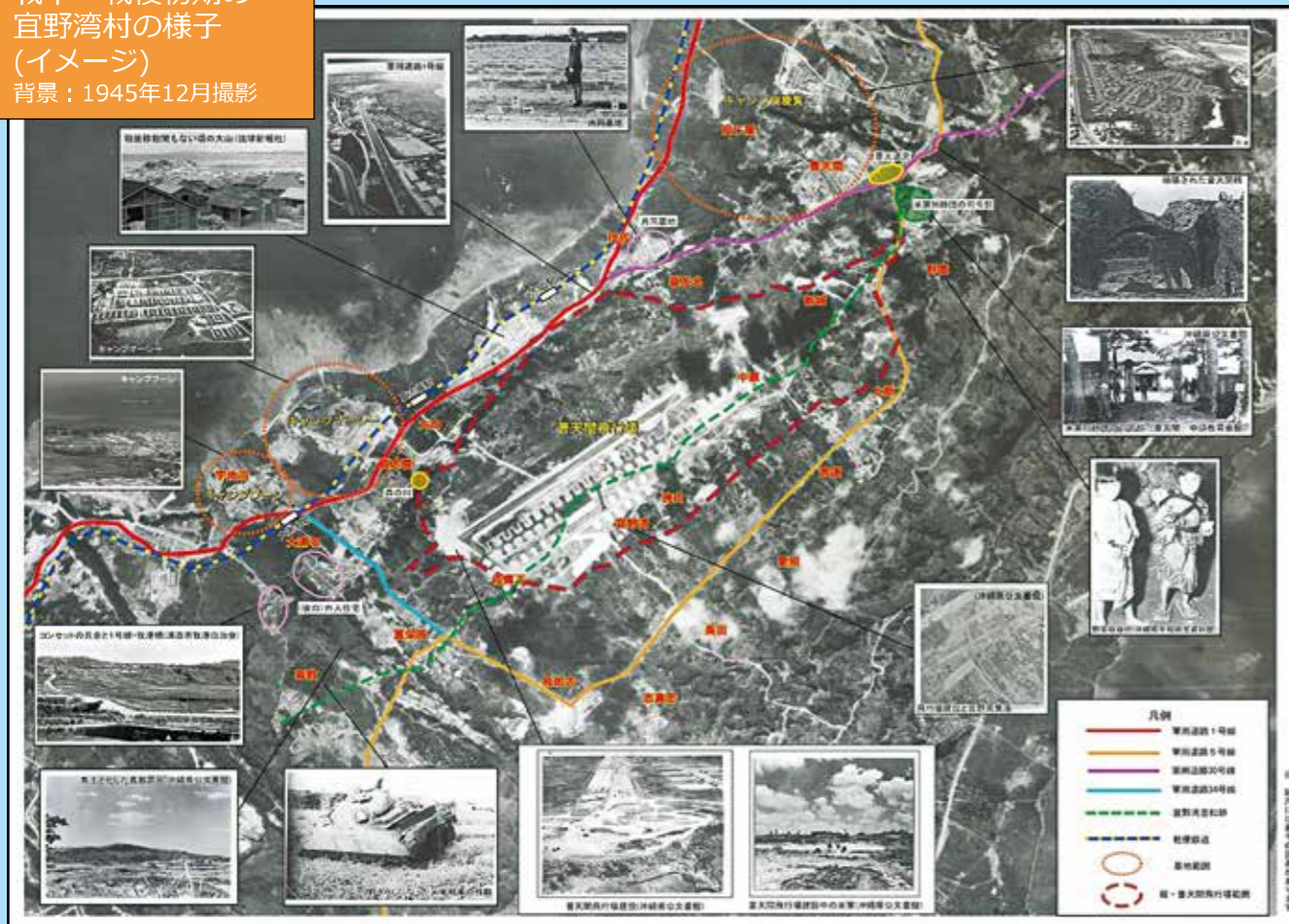


基地の成り立ち

戦前の宜野湾村の様子(イメージ)
背景：1945年1月と2月に撮影された写真を合成

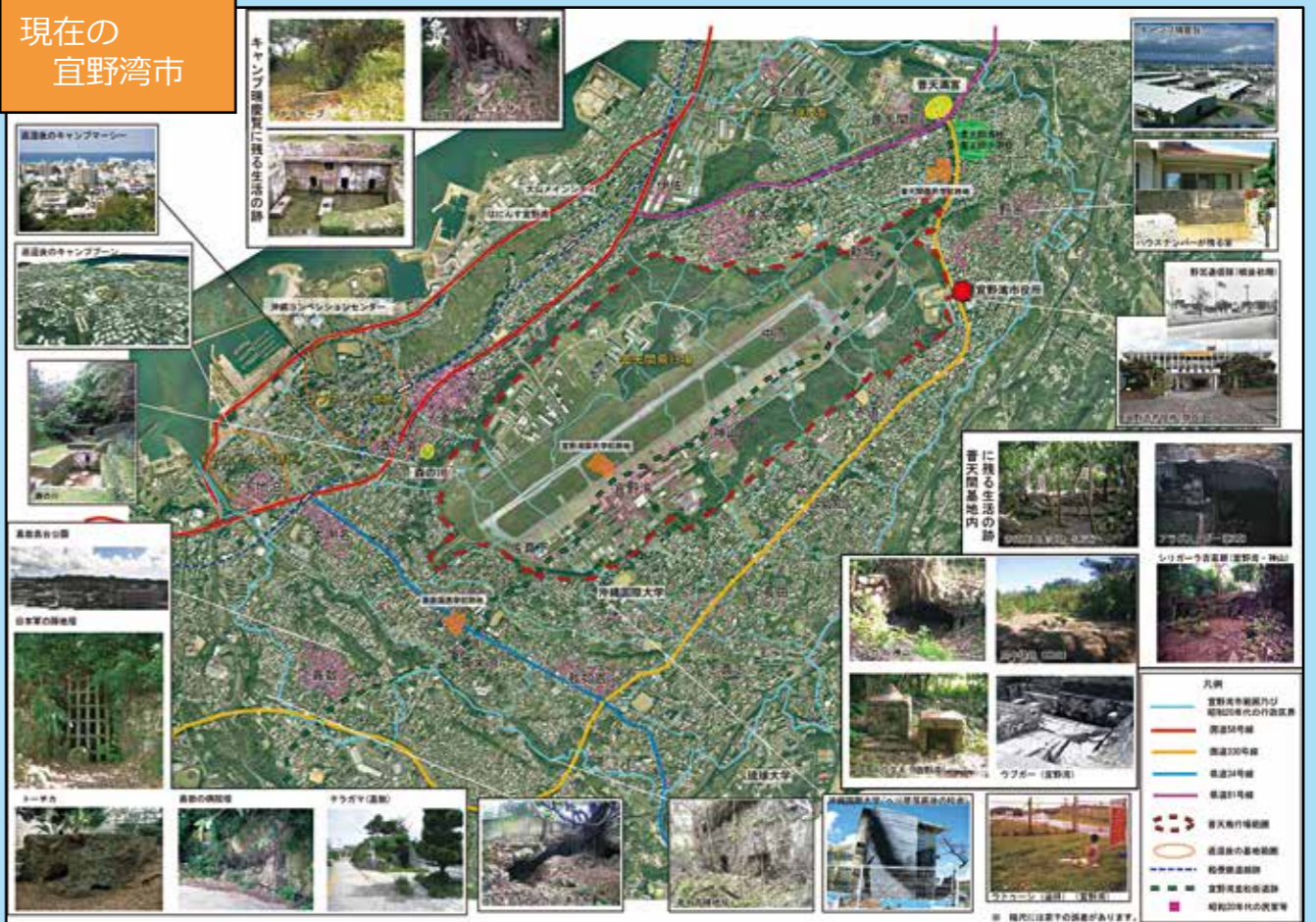


戦中～戦後初期の宜野湾村の様子(イメージ)
背景：1945年12月撮影



【宜野湾市の戦前から現在までの様子】

現在の宜野湾市



沖縄戦前の宜野湾村の中心は字宜野湾で、現在の普天間飛行場の中にありました。普天間飛行場の場所は当時、役場や国民学校、郵便局、病院、旅館、雑貨店が並び、いくつかの集落が点在し田畑が広がるのどかな丘陵地でした。

普天間から真栄原間の県道両脇には琉球松の大木がうっそうと茂り、並松（ナンマチ）街道として県民に親しまれていました。また、字普天間には、沖縄県庁中頭郡地方事務所や県立農事試験場など官公庁が設置され、沖縄本島中部の中心地でもありました。

普天間飛行場は、1945年の沖縄戦の際に、上陸してきた米軍に日本本土への爆撃基地として強制的に土地を接収され建設されたのが始まりで、1962年に基地のフェンスの設置が開始され、1972年沖縄返還がなされた際に、普天間飛行場として日本政府から米国へ提供されました。

1972年の本土復帰の頃まで、普天間飛行場はこのような運用はされておらず、補助飛行場としてパラシュート降下訓練が行われる飛行場でした。

その後、1974年に嘉手納基地にP3Cが移駐されたことに伴い、その補助飛行場として滑走路が整備され、1976年に岩国基地から千人規模の第一海兵航空団が県内に移設をするなど、徐々に基地機能が強化されていきました。現在のような運用がされ始めたのは、1978年に北谷町のハンビー飛行場が返還されたことに伴い、その機能が普天間飛行場に移されてからになります。

一方、宜野湾市は復帰前の1962年には市制が施行され、1975年時点で人口は5万人を超えており、普天間飛行場が現在のような運用がされ始めた時にはすでに、基地周辺には市街地が形成されていました。

※地図は宜野湾市文化課作成（地図中の一部写真は沖縄県公文書館、沖縄県平和祈念資料館、浦添市牧港公民館より提供）